

『源氏物語』研究

— 死に向かう紫の上の姿 —

古屋 梨佳

はじめに

『源氏物語』は、多くの人間の死が語られる。その特徴として、一人の人物の一回的な死ではなく、死が後の物語の展開に大きく関わっていくことが挙げられる。それは死の過程と死後に残された者の思いを描くことが重視されていると^{注1}考えられる。そのなかでも紫の上は、御法巻一卷を通じて、死までの過程が綿密に語られている。紫の上は『源氏物語』の登場人物の中で、唯一少女時代から死に至るまでが語られる人物である。紫の上は光源氏の妻であり、一人の人と称されながらも、自身の出自、光源氏の数々の女性問題に苦しみ、出家を願い、しかもその願いは夫である光源氏に退けられてしまう。紫の上はその苦しみゆえか、病にかかり、生死の境をさまようが、再び息を吹き返し、蘇生し、一命をとりとめる。しかし容体は良くなり、そのままゆるやかに死へ向か

うのである。ここでは、紫の上が改めて死と対峙し、他の登場人物では語られなかった細やかな心情、そして他者との関わりが語られている。結局紫の上は出家を果たせないまま死を迎えた。しかし、死にゆく道程を詳しく描いた、そのこと自体に意味があったと考える。死に向かう姿を通じて何が描かれたのか。以下、詳しく考えたい。

一 光源氏との関係

死に向かう紫の上が抱え込んでいたものを、それまでの展開から簡単にまとめておく。紫の上の生の原点は、光源氏と北山で出会い、引き取られ、育てられた点にある。二人の関係は夫婦・親子というよりも、遊びを通じて「いとをかしき妹背」（末摘花三〇六）兄妹のような対等な関係を結んできた。また同時に光源氏自らの手で女性としてのたしなみを教え、成長させるといふ関係で

もあつた。両親がいなくても同然の幼い紫の上から見れば、光源氏は「生ほし立て」（若紫二三）る親であり、幼心を全的に理解してくれる存在である。二人は男女の駆け引きとは無縁で、家同士のしがらみもない。直に触れ合い、顔を合わせ、教え育て、遊んだ少女。新枕で拗ねた紫の上の行為も、信頼関係があるからこそ行える。常識から逸脱した形で「馴れ睦」（須磨一九〇）んだゆえの信頼、これこそが二人の絆であつた。

しかしその絆を問いただす明石の君と権の姫君の存在により、紫の上の子のいないこと、地位の揺らぎが露呈していく。しかしこれらは、紫の上が明らかに嫉妬を表し、一方で光源氏が忌憚なく恋文を見せるなど、「心の隔て」（明石二五九）を作らないよう、紫の上への変わらない思いを語ることに、沈静する。それは明石の君の身分では紫の上の立場を脅かす存在にならず、また、権の姫君は光源氏の妻にならなかつたからであつた。ところが、女三の宮が降嫁すると、後ろ盾がない紫の上には、「生ほし立て」られ、「馴れ睦」んできた関係を頼みに、光源氏の妻として生きる以外、術のないことが露呈するのである。ここから紫の上の生きる糧であつた絆が崩れだす。

朱雀院皇女である女三の宮が准太上天皇の光源氏の正妻であるのは、当然の結果である。その常識の前では、長年二人で「馴れ

睦」んだ関係が無意味であることを、紫の上も当然理解している。だから紫の上は憎んでも仕方ないと自分に言い聞かせ、居心地の悪さを受け入れながら、〈不安定な立場の妻〉として居続けることを余儀なくされる。紫の上は世間の目から逃れたくとも、源氏から離れたくとも、帰る家がない。^{注2}しかも追い詰める激しい胸の内とは裏腹に、世間に一目置かれる妻であるためには、「おいらかなる人」（若菜上五四）と評される理想性が要求されていく。やがて紫の上は「おいらか」な外面と、本心の乖離が大きくなり、追い詰められてゆく。それでも紫の上にとつて、これまでの生が光源氏との関わりでのみ築かれてきたのだから、社会的プライドからいつても、また女性としての情愛からいつても、光源氏に執着するほかない。

一方、光源氏の方も紫の上に一層執着し、その思いを以前と変わらぬ方法で証だて続けた。「隔て」をおかないよう、己の女性関係を語らいながら、紫の上に変わらない愛を誓う。しかし、この行為は本心でもありながら、彼にもこの状況を変える力がなく、紫の上の我慢をしてもらうしか手立てがないことを示している。だが紫の上のなかには、徐々に光源氏に対する「隔て」が芽生え、自分が抱える憂愁に気付いていく。変わらない愛を誓う光源氏と、変わりつつある愛を感じている紫の上の感情はすれ違ふばかりで、

分かり合う兆しはない。長年信頼の根源であった「馴れ睦」^{びは}、たった一人の皇女によって崩れてしまった。そして紫の上は、「馴れ睦ぶ」^絆への不信、そして光源氏に執着せざるを得ない状況から、逃げ出すように出家を志す。紫の上は出家願望の理由を次のように明かす。

今は、かうおほぞうの住まひならで、のどやかに行ひをもと
なむ思ふ。この世はかばかりと、見はてつる心地する齡にも
なりにけり。
(若菜下一六七)

ある程度の年齢に達して出家を志すのは当時の常識的な判断だが、紫の上の場合、出家を願う本心は年齢ではない。「おほぞうの住まひ」と苦しいまま変化しない現状をとらえ、「この世はかばかりと、見はてつる心地」と失望感を抱いている。紫の上は「苦しいままのいま」を打破するため、自らの居場所を出家の世界へ移行させようとしている。しかしその懇願は、光源氏に当然のことながら拒否されてしまう。

女三宮の降嫁以後、時が経つても、いや経てば経つほどに、〈苦しいままのいま〉が深まってきた。養女の明石女御は皇子の出生と同時に明石一族の一員の自覚を深くし(若菜上)、兄弟の即位によつて女三の宮は二品の宮になった。(若菜下一七七)紫の上は「わが身はただ」ところの御もてなしに人には劣らねど、あまり年

つもりなば、その御心ばへもつひにおとろへなん」(若菜下一七七)と、依然として光源氏との「馴れ睦」^{んできた絆}、それ一つだけを貴族社会に繋ぎ留める術としていた。しかし、それは結局人の心である以上、変わるもの、いつか消えるものだ。ならばその前にと紫の上は考える。後ろ盾となる親も、将来を継いでいく子も持たない紫の上は、良くて〈苦しいままのいま〉を続け、悪くすれば光源氏の愛が衰えて人々にあざ笑われるようになるだろう。だからせめてその前に出家という手段でも、どうにもならないこの世から解放されたかったのだ。しかし光源氏は、紫の上の出家を絶対に認めない。「隔て」ない生活を望み、「ことなる心のほど」(若菜下二〇八)を最後まで見届けてくれという光源氏の懇願は、皮肉にも紫の上を苦しい〈いま〉に縛り続ける。ゆえに光源氏が変らない心を示せば示すほど、両者の「隔て」は広がり続ける。相手に何かを求める限り、気持ちの差は広がり続けてしまうのだ。

結局女楽の夜に紫の上は病に倒れる。〈苦しいままのいま〉を生き続けるだけの人生と自覚した以上、生きていく意味を見出せなかった。「人よりことなる宿世もありける身」(若菜下二一一)だが、その一方で「人の忍びがたく飽かぬことにするもの思ひ離れぬ身」(同)と、心は満足しない渴望した思いがある。二つの「身」

の違いは、紫の上の自己の揺れが究極に達している表れであろう。そして自身の生きてきたすべてを否定するかのごとく、自身の人生を「あぢきなくもあるかな」（同）と一蹴し、紫の上は倒れる。

紫の上を貴族社会に繋ぐ、光源氏との間の「馴れ睦」ぶ絆が崩れた以上、そこには苦しみしがなく、この世で生きる意味はなかった。

紫の上の病はよくならず、徐々に死に向かつていく。そしてとうとう物の怪のため絶息しかけた。ところが、息を吹き返し、再び生を受ける。その時「人わるく」（若菜下二四一）見えるほど「思し嘆」（同）き、必死に仏に祈念する光源氏の姿を見る。『源氏物語』内において通常死に向かう人間の病床に寄り添う人間は、血縁関係のある家族である。それは柏木や落葉の宮の母の死の場面の描写からも窺える。それが今、光源氏一人なのは、紫の上には家族が光源氏のみということを表しているよう。つまり、紫の上には真に嘆いてくれる人は光源氏しかいないのである。また、光源氏の異様ほどの嘆きの裏には、光源氏に孤独さが垣間見える。その姿を見て心を打たれた紫の上は、「むなしく見なされたてまつらむがいと思ひ限なかるべければ」（若菜下二四二―二四三）ともう一度元気になると思ひ直すのである。

真の「死」を実感したことをきっかけとして、紫の上は、自分

の境遇への問いを止め、自分のために嘆く孤独な光源氏のために残りの命を生きていく。それは、光源氏がいてこそ、自分の存在があると受け入れていくことではないか。やはりそこに紫の上の生の基盤があるのだろうか。

蘇生から数年たった御法巻冒頭、近づく死期を感じている紫の上は「この世に飽かぬことなく、うしろめたき絆」（御法四九三）すらないため、無理に生き長らえたいとも思わないが、ただひとつ、光源氏との「年ごろの御契り」（同）が絶ち、「思ひ嘆か」（同）すことだけが気がかりであるという。一方、光源氏も「後の世には、同じ蓮の座をも分けんと契りかはしきこえたまひて、頼みかけたまふ御仲」（御法四九四）ではあるが、出家をするとすると、病のままの紫の上と「行き離れ」（同）てしまうことができないうと思っている。絡み合うような二人の心内からわかることは、紫の上の蘇生後、二人の思いは全く変化せず、互いの存在が生の根源のごとく、離れがたい思いが一層強まっていることだ。二人の間にある「契り」の存在は、夫婦、家族ゆえ感じるといふよりも、共に生き、互いの存在を求め、求められて生きてきたため、感じるものだろう。

親子でも兄妹でも夫婦にも分類できない関係から始まった二人だからこそ、信頼だけが二人をつないでいった。しかし、一度崩

れ、紫の上の絶命によって問い直され、改めて互いが生の根源であると捉え直したのではないか。それが紫の上と光源氏の関係であつたのだ。

二 女性同士の関係

命の限りを予感していた紫の上は、「私の御願」（御法四九五）で書写させていた法華経千部を供養しようと、春に法華経千部供養会を催す。光源氏に出家を許されない紫の上は、死後のため、せめて功德を積もうとしたのであろう。大々的な法会であつた。

その莊嚴で華やかな法会の合間に紫の上は様々な人を見つめては感慨を深くする。そして会の合間に明石の君と花散里と歌を交わす。それまで物語内で紫の上が和歌を贈る相手は、ほぼ光源氏である。唯一、胡蝶巻で秋好中宮に贈るが、それは前年交わした秋の歌の返事をするという理由があつた。しかしこの法会では、地位が下、もしくは同等の者に紫の上が自ら贈る。この自ら女性に歌を詠み掛ける行為は注目しなければなるまい。紫の上は女性同士の歌を通じてどのような感慨にたどり着いたのだろうか。

法会の中、死期の近い紫の上は、その景色や訪れる人々を見つめながら、これが最後と思ひ、自然と「あはれ」（御法四九六）という感情が込み上げる。その心中のまま、歌を贈つた相手が、明

石の君である。歌は紫の上が可愛がっている義理の孫の三の宮を遣つて届けられた。三の宮を遣ひ、真の祖母の明石の君に歌を届けることで、同じ祖母の立場同士、いがみ合うことのない縁でつながっていることを示している。明石の君は光源氏を夫にもつ宿縁の仲である。光源氏の須磨流離以降、紫の上は明石の君に何度も嫉妬する。しかし明石の姫君の引き取りにより、二人は同じ娘を共有する親として、互いに思いやる関係に変化していった。

結果、二人は夫だけではなく、娘、孫という人物を介してつながる教奇で深い縁になつた。ゆえに紫の上の人生で、最も深く関わつた女性である明石の君に歌を贈つたのではないか。その歌には紫の上の吐露せざるを得ない心境が詠われている。

惜しからぬこの身ながらもかぎりとして新尽きなんことの悲しき
（御法四九七）

惜しくはないこの身だが、寿命が尽きることが悲しいという意である。死は誰にも等しく訪れ、いずれ身は朽ちていく。それを理解していても、終わりが訪れることに寂しさを感じずにはいられない。この世はすべて終わりが来ると納得しつつも、受け入れられない葛藤や苦しみが吐露されている。一方、明石の君の返歌は、

新こる思ひは今日をはじめにてこの世にねがふ法ぞはるけき

(同)

薪の行道をして法華經に奉仕なさるの、今日が始めであつて、この世で仏法を成就なさる道はまだ続くでしょう、という意である。明石の君は、紫の上がまだ未永く生きていくことを願う歌を返した。地位が低い明石の君からは、紫の上の心を理解するかのよう^にに慰める歌は返せない。「そこはかとなく」(同) 立場をわきまえて返歌するしかない。しかしそれは、死を目の前にせまる者の思いを、共有できず、受け止めきれないことを際立たせている。こうして明石の君に歌を贈つた翌日、紫の上は次のような感慨を抱く。

年ごろかかる物のをりごと^に、参り集ひ遊びたまふ人々の御容貌ありさまの、おのがじし^才ども、琴笛の音をも、今日や見聞きたまふべきとちめなるらむ、とのみ思さるれば、さしも目とまるまじき人の顔どもも、あはれに見えわたされたたまふ。まして、夏冬の時につけたる遊び戯れにも、なまいどましき下の心はおのづから立ちまじりもすらめど、さすがに情けをかはしたまふ方々は、誰も久しくとまるべき世にはあらざなれど、まづ我独り行く方知らずなりなむを思しつづくる、いみじうあはれなり。

(御法四九八―四九九)

人の動きに目線を注ぎ、普段なら目に留まるはずもない人々にも

「あはれ」に思う。そして、昨日明石の君と歌を交わしたからであろうか。「情けをかはしたまふ方々」と、妻たちに思考を傾ける。「夏冬」は六条院夏の町に住む花散里、冬の町に住む明石の君を指すのだろう。(『細流抄』、『花鳥餘情』)「夏冬の時につけたる遊び戯れ」の記述は、物語内に描かれないが、春や秋のように大々的な催しを行わない「夏冬」をあえて思い出すのは、日常でもこの妻たちと交流を図っていたことを窺わせる。過去の薫物合わせ、女樂では妻たちが個性を発揮していた。また、女三の宮の男子の三日目の産養祝(柏木二九九)や、出家した女三の宮の持仏開眼供養の捧物(鈴虫三七七)献上の際は、明石の君や花散里も、それぞれ「いどましき」(柏木二九九)を持って献上していた。この時女三の宮に対して複雑な思いを抱えていた紫の上は言うまでもなく、花散里も明石の君もそれぞれの思いを抱えていただろう。それでも妻の役割を果たし、競争心を持つて威厳を保ち続けた六条院の妻たちであった。それは光源氏の知らない妻たちの顔であろう。出合いの縁は光源氏であるが、その後「いどましき」を持ちながら、このように関係を保ち続けられたのは、妻たち、そして六条院の主である紫の上自身の力である。紫の上にとつて妻たちとの関係は個を存分に発揮できる場であるのだ。

その妻たちの中で「まづ我独り行く方知らずなりなむ」と、現

世から自分の姿が消えるとはどういうことかを紫の上は考え出す。自らの死が「行く方知らず」になるといふ観念を抱いている。死を「消ゆ」、「なくなる」といふ語を用いずに、「行く方知らず」と表現することから、紫の上は死を現世から切り離さず、連続の先にあるものとみている。^{注3}つまり死は「この世の不幸や罪業がおのずとかき消され浄化されるもの」^{注4}ではなく、向かう場所があるが、それが遺された人々にはわからない場所にあるということである。紫の上はそこに自身の死があるととらえているのであろう。それは御仏が救ってくれる浄土の世界ではない。紫の上は仏の世界にすぎることではない。むしろ自分の生そのものよりも、自分の存在が他人の中から消えてしまうことを最も恐れ、寂しさを抱いているのではないか。それゆえ紫の上は、この世の人々への執着を止められないのである。しかしこれを他人に語ったところで何になる。死は誰にも止めることはできない。ゆえに独りその思いを心中に収めていくしかないのである。しかし文末の「いみじうあはれなり」といふ感慨は、内に収めきれないほどの昂る思いを示しているよう。この感慨を経て、法会の最後に花散里に贈った歌には、次のような感慨が表されている。

事はてて、おのがじし帰りたまひなんとするも、遠き別れもきて惜しまる。花散里の御方に、

絶えぬべきみのりながら頼まるる世々にと結ぶ中の契りを
(御法四九九)

ここで単なる「別れ」ではなく、「遠き別れ」とするのも、前述の「行く方知らずなりなむ」から生まれ出る思考であろう。^{注5}歌の意は、これが最後の法会であろうが、この功德により結ばれるあなたとの生々世々の縁を頼もしく思うという。明石の君に贈った歌と異なり、やや形式的な別れの挨拶の歌である。「みのり」に「身」をかけて、迫りくる死への不安を歌いながら、来世に向けて縁をつなぐことを願う。しかし、この歌は明石の君の場合と異なり、死の不安を前面に出していない。これは理解されない死への思いを味わったあとだからであろう。^{注6}それでも歌を詠まずにはいられない。溢れる感情を歌に託すしかないのだ。それを二人に歌として贈ることで、自らの心、存在を、相手そして自分自身にも示しているのではなからうか。

法会の中で交わされる妻たち二人とのやり取りは、紫の上自身が構築した関係の中で行われた。本来妻同士は関係を結ばなくても良い。しかし紫の上は疎かにせず、長年にわたり関係を築いてきた。それは紫の上独自の力であり、その集大成が法華経千部供養会で交わされたやり取りだと考えられる。近くもなく遠くもない、均衡が保たれた関係だからこそ、孤独な死に対峙する率直な

感情を歌にできたのかもしれない。自力で築き上げた関係だからこそ、大切な存在であり、その人たちに忘れてほしくないという自己の存在を主張する。このように、己の生きた証を、そして自己の存在を確認していく紫の上が、ここで描かれているのである。

三 子孫たちとの関係―遺言を通じて―

法華経千部供養を終え、夏を迎えた。紫の上の容体は春から変わらぬため、とうとう養女の明石の中宮が退下してきた。紫の上は喜び、起き上がって明石の中宮と会話する。

上は、御心の中に思しめぐらすこと多かれど、さかしげに、亡からむ後などのたまひ出づること多なし。ただなべての世の常なきありさまを、おほどかに言少ななるものから、あさはかにはあらずのたまひなしたるけはひなどぞ、言に出でたらんよりもあはれに、もの心細き御気色はしるう見えける。

(御法五〇一)

紫の上は明石の中宮に、「亡からむ後」の事をはつきりとは言わないが、「なべて世の常なきありさま」、無常の世を明石の中宮に諭していく。またこの後に、身よりのない侍女たちのことは、はつきりと口に出して、後見を依頼している。これらのことから、ここでは紫の上のそれとない遺言が語られているとされる。^{注7}

しかし、「御心の中に思しめぐらすこと多かれど」と何か言いたいことがあるにもかかわらず、「さかしげに」語らない。中宮になった養女に遠慮している様子である。これは、実の母であればはっきり言えるだろうが、義理の母である紫の上は、遺言らしい遺言を言えないのではなからうか。『源氏物語』内で記述される「遺言」は、後継ぎ、入内といった皇統や政治に関係することが多数を占める。そして死者の遺した言葉が、遺された者の今後の人生を制約しながら物語を進行させている。さらに遺された者がそれを「遺言」と認識することによって公に出され、利用されながら遺言は遂行されていく一面も見られる。こうして、遺された者同士の関係が新たに生まれ、それが物語の展開の一部になっていく傾向がある。

しかし紫の上はあえて「ゆゆしげになどは聞こえな」(御法五〇二)すことなく、遺言であると思われなように意識しているようである。ただ、「はべらずなりなん後に」(同)と後が心配な女房のことを頼んでいることから、遺言とも言えよう。しかし『源氏物語』内における遺言は、残された者の生き様を制約するものや、死にゆく者が伝えたいこと、例えば子どもなど後々気にかかるところを頼むものと定義すれば、紫の上が明石の中宮に語ったことは、完全な遺言とは言えない。むしろ誰も制約することのない

ただ「語るだけの遺言」が紫の上の「遺言」ではないか。紫の上には「うしろめたき絆」(御法四九三)がない。後世に引き継ぐべき形見も持つていない。つまり自身がこの世に存在した証は、死と同時に無になる。紫の上は自分が存在したことを証明するものが後世にないことが、露呈している。だからこそ紫の上は、義理の孫の三の宮に、二条院とその庭の桜と紅梅を託したと考えられる。紫の上は秋になる直前、遊びに来た幼い三の宮を膝に抱きながら語り掛ける。「まろがはべらざらむに、思し出でなむや」(御法五〇二)と「人の間かぬ間に」(御法五〇二)尋ねた。三の宮を膝に抱え、人がいない間に発した言葉は、公式の場では言えない本心に近いものではなからうか。紫の上は病に倒れてから、孫たちの行く末を見られないことを嘆き、孫たちに「忘れたまひなむ」(若菜下二二五)ことを懸念していた。ゆえに「思し出でなむや」という問いかけは、死後、自分が生きていた、存在していたことを三の宮に思い出してほしいという意が含まれているのではないだろうか。これは前述の「我独り行く方知らずなりなむ」(御法四九九)から続く思いであろう。ここでも紫の上の不安は、自分の存在が他人の中から消えてしまうことだけが不安だということがわかる。

さらに、何も事情を知らない幼い三の宮に聞くことも重要であ

る。紫の上は可愛がつているもう一人の孫、女一の宮がいる。彼女の年齢は不明だが、三の宮よりは年上である。ゆえに気遣いができる齢であろう。紫の上はこれまで明石の君、花散里、明石の中宮らと歌や「御物語」(御法五〇一)を交わしながら、それとなく死に向かう心の内を語られてきた。しかしいくら心の内を語られたとしても、死を実感していない者にとっては氣遣って励ますしかない。死は死にゆく者にしかわからない。誰かが共に死の道を歩むわけにもいかない。様々な人と語りつつも、理解されない死への孤独感が強まる中で、辿り着いたのが、幼く死ぬことさえもわからない三の宮であった。「まろがはべらざらむに」という単純な問いかけに対し、三の宮の「いと恋しかりなむ。(中略)おはせずは心地むつかしかりなむ(御法五〇二)と、いなくなったら恋しい、嫌な気分になってしまうという素直な答えを、紫の上は求めていたのではなからうか。それだけで心は満たされたのか、紫の上は微笑みながら涙を落とす。

そして紫の上は三の宮に二条院の紅梅と桜を渡す。五歳の三の宮に渡すことは、理解のある大人に渡すこととは異なる。三の宮は大人になって覚えているかも知れない。紫の上はそれを見越して伝えているのではないか。この譲渡は物語内では「遺言」と記されていない。幻巻で三の宮の紅梅と桜を大切にしている様子

が描かれるが、三の宮が「母ののたまひしかば」（幻五二八）と言っているだけである。また宇治十帖では、二条院に住む三の宮の様子が描かれている。

紫の上の御心寄せことにはぐくみきこえたまひしゆゑ、三の宮は二条院におはします。春宮をば、さるやむごとなきものにおきたてまつりたまて、帝、后いみじうかなしうしたてまつり、かしづききこえさせたまふ宮なれば、内裏住みをせさせたまつりたまへど、なほ心やすき古里に住みよくしたまふなりけり。

（匂兵部卿一七一八）

三の宮が直接託されていない二条院に住む理由は、紫の上がりわけ可愛がり育てられた場所だからである。父の帝や、母の明石の中宮が、彼に宮中に帰ってくるよう催促しても三の宮が帰らないのは、二条院が「なほ心やすき古里」と思っているからである。つまり成長した三の宮は、紫の上の「遺言」だから二条院に住んでいるのではなく、自分が幼いころから育つた場所として、住み心地がよいと思っているからである。三の宮は、紫の上の遺言に制約されてはいない。ただ、「かの紫の御ありさまを心にしめつつ、よろづのことにつけて、思ひ出できこえたまはぬ時の間なし。」（匂兵部卿二二）と紫の上の存在した記憶が二条院への愛着となり、住み続けるのだろう。

そして、二条院の紅梅と桜に関しては、幻巻以降、語られない。しかし三の宮は、梅の花自体を「御心にとどめたまふ花」（紅梅五〇―五一）と思っていることから、三の宮の心には「花のをりをりに心とどめてもて遊びたまへ」（御法五〇三）という紫の上の言葉が心に残っているのかもしれない。つまり紫の上が遺した紅梅と桜は幻巻で思い出されるだけで、公にはされず、匂宮、紫の上、そして最後に光源氏に伝わり、三者の間だけで成り立つ遺言であった。

子も家も、何も所有していない紫の上には、自分が存在した記憶以外、結び付くものがない。「わが御殿と思す二条院」（御法四九五）でさえ光源氏の邸である。しかしこの邸は少女時代を過ごし、光源氏と共に喜びも悲しみも育んだ、紫の上の記憶が残る場所でもある。だからこそ二条院の財産等を譲るのではなく、「花を愛でてほしい」という〈心〉を紫の上は最後に残したのである。それは、かつてこの二条院で花を愛でる人がいたことを憶えていてほしいだけなのではないか。紫の上はそれだけでよいのである。誰かを制約することはなく、公に出されることもない、自分の生きていたことを心の中にひっそりと宿らせたものが紫の上の「遺言」だった。

四 再び光源氏へ―露の表現―

御法卷冒頭以降、ほとんど描かれなかつた光源氏が、紫の上の臨終を前に再び描かれる。春、夏と様々な人と交流しながら、死に至るまでの感慨を深めてきた紫の上。最期の秋は、やはり光源氏との関係に戻ってくる。今まで交わってきた人々との関係は、全て光源氏がいたからこそ成し得た関係である。紫の上はその中で独自の関係を築いてきた。これが紫の上の生き方である。そのことを噛み締めるかのように紫の上は他者と交流し、再び生の基盤であつた光源氏と向き合う。

最期の場面は、風に吹かれる秋の草花を前にして光源氏と明石の中宮との唱和歌が交わされる、紫の上は宮中に帰ろうとした明石の中宮に、もつと留まつてほしいと思うが、位を配慮し、口に出せずにいたところ、中宮の方から挨拶にやつてきた。夕方、その場に訪れた光源氏は、珍しく元気な紫の上の様子に無上の喜びを表す。紫の上は喜ぶ光源氏の様子を見て、自分が死んだらどれほど嘆くか、と思ひやつて歌を詠みかける。そこに涙や、命の儂さを喩える景物、「露」が、この場面を占めていく。この「露」が紫の上の死の儂さをも極立たせるが、もう少し詳細に見ていくことで、儂さだけではない「露」の役割が見えてくる。

風すごく吹き出でたる夕暮に、前裁見たまふとて、脇息に寄りゐるたまへるを、院渡りて見たてまつりたまひて、

(略)

つひにいかに思し騒がんと思ふに、あはれなれば、

〔紫〕 おくと見るほどぞはかなきともすれば風にみだるる萩のうは露

げにぞ、折れかへりとまるべうもあらぬ、よそへられたるをりさへ忍びがたきを、見出だしたまひても、

〔源〕 ややもせば消えをあらそふ露の世におくれ先だつほど
経ずもがな

とて、御涙を払ひあへたまはず。宮、

〔明〕 秋風にしばしとまらぬつゆの世をたれか草葉のうへと
のみ見ん (御法五〇四―五〇五)

この御法卷と同じ「露」を詠う歌に、蓮の露の贈答歌がある。それは紫の上の蘇生後、夏の青く清々しい景色の中で交わされた。小康を得た紫の上は、病の身体で二条院の庭を見出す。紫の上は目に映る青くむせ返るような夏の景色を眺めながら、生き残ったことをしみじみと思う。その景色の中にあるのが、蓮の上の露であつた。ほんのひと時しか存在できない儂さを抱えながら、葉の上に大ふりに乗っている露は、夏の景色の中できらめきを放つ。

それはまるで生き残った命の輝きと、長くない寿命という紫の上の感慨が、情景と重なっていく。一方光源氏は、紫の上の死が自分の「限り」（若菜下二四五）と思ひ、紫の上にひたと寄り添い涙を流す。紫の上はそのような光源氏を「あはれ」（若菜下二四五）と思ひ、目の前にある「露」に自身の無常の命をたとえて詠んだ。

しかし御法巻の場合、季節は秋であり、風が吹いている。そのため、露の印象が夏のもの異なる。詳細に語られる夏の景色とは異なり、「風すこく吹き出でたる夕暮」、「前栽」という景物しかなく、紫の上の歌により「萩」があることが分かる。実際には風音を聞きながら夕闇のむこうに幻視する景色である。^{注8} また、見えない（描かれない）風に翻弄される萩の花や零れ落ちる露の玉を、聞こえる（描かれた）荒涼とした風音は、死という闇に零れ落ちていく人の命の心細さをイメージさせる。^{注9} つまり、風の音は聞こえても、萩、ましてやその上に露が乗っているかは見えていないと推測される。蘇生後の歌のように、目に見えて葉の上に確実に存在している露ではない。御法巻の紫の上の歌は、実景を詠むのではなく（想像の中の露）を詠んでいる。さらに「風にみだるる萩のうは露」は（静的）な露ではなく、一瞬にして吹き飛ぶ、（動的）な露だ。「風」という見えない強い自然の力に揺さぶられて消えて見えなくなる露は、抵抗する間もなく死期が迫ってくる紫の上

上の緊迫した心情を想像させる。こうした心情が先行して、情景と響き合い、臨終の迫る思いと寂しさを際立たせていく。それが「げにぞ」と光源氏を納得させている。そして「忍びがた」い気持ちになった光源氏は、共に死にたいという歌を返す。蘇生後の歌のように、来世まで一蓮托生を願うことなく、今は共に死にたいと詠う。来世を願う余裕などない。共に死ねずに、紫の上が自分を置いて先に逝ってしまうという目の前の死を受け止めざるをえない。一方明石の中宮は、紫の上の歌から「秋風」、「草葉のうへ」、光源氏の歌から「露の世」を歌に取り入れ、皆も同じ無常の世を生きているという歌を詠む。こうして明石の中宮が最後に歌うことにより、夫婦間だけの悲しい別れではなく、死がこの世の普遍のものとして広がりを見せている。だから三人が詠み終えた時、光源氏の「かくて千年を過ぐすわざもがな」（御法五〇五）と思ひながらも、それは「かけとめん方なき」（同）という思考につながっていくのである。こうして露を媒介にして三者三様に命の限りを「露」に託して詠むことで、それぞれの生き方は違っても、死に至るまでの間、同じ世に共に生きた者同士の感慨が浮かんでくる。

そして終焉がやってくる。苦しみだした紫の上の手を養女の明石の中宮がとつさに捉えたことは、位という形式を超えて、義理の母娘のつながりが感じられよう。それを光源氏は見守るしかで

おわりに

きない。その眼には「まことに消えゆく露の心地して限りに見え」（御法五〇六）る紫の上の姿が映っていた。そして蘇生もむなしく、紫の上は明け方に「消えはて」（同）る。紫の上が歌に呼び込んだ「露」は、歌を超えて紫の上の臨終の姿にも重なり、遺された者に重く響くものとなっていく。

そのうえで、「露」と「あはれ」の関連について考察する。紫の上は御法巻で度々「あはれ」を感じていた。最後の歌を詠む直前も、光源氏に「あはれ」を感じる。死がせまるほど「あはれ」を感じざるをえないのは、現世への執着の表れであると考えられる。それは人間、そして現世への執着を断って死ぬことの難しさを示している。紫の上は出家を願いつつも、光源氏を振り切つて断行することはなかった。そこには断ち切れない愛執があつたからだ。それは臨終のときまで断ち切れなかった。しかし、その断ち切れない愛執を断つように詠われた「露」の歌は、無常の世とは理解しつつも、断ち切れない「人のあはれ」を、逆に際立たせる景物として、紫の上の臨終場面を構成しているのである。生命の儚さを喩える「露」は、紫の上自身によって呼び込まれ、彼女の死への感慨と重なりながら、その死を囲む二人を共振させる。そして消えゆく直前まで抱かざるをえない光源氏への愛執を極立たせながら、紫の上の死を送り出しているのである。

紫の上の死後は、数多くの人々が嘆き悲しむ姿が描かれる。『源氏物語』は遺された者の思いを描くことを忘れない。紫の上の遺体はこの上なく美しく描写されるが、「骸を見つつもえ過ぐしたまふまじかりけるぞ」（御法五一〇）と、光源氏は死体をいつまでも残すことなく、即日葬送を行う。死を看取つた光源氏は、以後涙に明け暮れ、放心の一途を辿る。涙にくれる光源氏を描いた幻巻は、残された者が亡き者の死を受け入れられるまでを描き出していく。紫の上は子も形見もなかったため、遺された光源氏は継ものもなく、さまざまように紫の上の面影を探し歩く。そこでは、時間の経過と、他者と語ることでしか悲しみを昇華しきれない、孤独な光源氏の姿が描かれる。遺された者の悲しみは、語ることでしか癒されない。むしろ語つても癒されることはないのかもしれない。さまざま光源氏がそれを物語つている。一年を通して紫の上との思い出と自身の憂愁の人生を重ね合わせて嘆いていくが、最後に紫の上の手紙をすべて焼くことで、過去を断ち切るようにしようやく光源氏は出家へ向かうことができたのだった。

光源氏と長年の「馴れ睦」んだ関係に生の基盤を置き、その関係に信頼を寄せてきた紫の上だが、時とともに光源氏との関係も

変化していった。紫の上の人生は光源氏との関係、移り変わる世、そして今までの自己の境遇の失望ゆえ、絶命を招いたが、蘇生を機に過去の自己に捉われず、今ある自己を見つめていく。死期を感じながら、改めて現世を見つめ直した時、紫の上は妻、母などの役割を超えて、一人の人間として他者と対峙していると考えられる。そこで死は誰にでも訪れるが、死の先は浄土ではなく、誰にも知られない孤独な場所だと悟った紫の上は、他者と交流しながらこの世に自分の存在した証を一つずつ確認するように、死へ向かっていく。光源氏に与えられた世界の中で、紫の上自身が関係を築いた人々を見つめながら、自己を見出だしていく。出家ではなく、その先にある死を見据えた紫の上。それは、出家の叶わないはかなく悲しい女性が描かれているのではなく、苦しみながらも最後まで他者との関わりを断ち切れない人間の本質、そこに生の証を見出だそうとした女性が描かれているのであろう。

注

注1 藤本勝義「源氏物語における死と救済（公開シンポジウム 日本文学における死と救済・怪異の視点から）」（清泉女子大学人文科学研究所紀要36「二〇一五年」）

注2 今井久代「紫の上物語の主題と構造」（『源氏物語構造論』作中人物

の動態をめぐって』風間書房、二〇〇一年六月）

注3 鈴木日出男「紫の上の孤心」（『源氏物語虚構論』東京大学出版会、

二〇〇三年二月）

注4 同

注5 同

注6 鈴木日出男「紫上の絶望―御法巻の方法―」（『季刊文学・語学49』

日本古典文学会、一九六八年九月）

注7 小町谷照彦篇『源氏物語の鑑賞と基礎知識⑩御法・幻』（至文堂、二

〇〇一年十一月発行）、五七頁

注8 今井久代「源氏物語の自然表現―若菜巻以降の紫の上の叙述をめぐつ

て」（『東京女子大学紀要論集』62（1）、二〇一一年九月）

注9 同

注10 葵上や夕顔の遺体は、完全に死亡したことが認められるまで、しば

らく安置しておく記述がある。

付記

本文引用はすべて『新編日本古典文学全集 源氏物語』（小学館）の表記、頁数による。

（ふるや りか 二〇一七年博士前期課程修了）